

「～にとっての良さ」について

成田 和信

私は福利 well-being に関心がある。ある人の福利とは「その人にとって良い状態」のことだと私は理解している。ここでの「～にとっての良さ」は、「～から見て良い」とか「～が良いと思っている」という意味での「～にとっての良さ」ではなく、「～の利益になる」とか「～のためになる」で言い換えられるような良さである。だが、このような良さは、どのような良さとして分析できるのであろうか。私は、この問題について何らかの答えを出したいと思っている。ここでは、スティーヴン・ダーウォール Stephen Darwall の分析を検討し、それに若干の修正を加えることで、有望であると思われる分析を提示したい。

しかし、やっかいなことに、G. E. ムア Moore の考え方を受け継ぐドナルド・リーガン Donald Regan は、そもそも「～にとっての良さ」は困難に直面すると主張する。(そしてリーガンは、だからそのような良さは存在しないと言っている。) この批判が正しければ、私が考える福利も困難に直面することになるから、私としては、どうにかこの批判に対処しなければならない。ちょうど良いことに、ダーウォールの分析を私が修正したものを使えば、この批判に対処できる。

したがって、まず「～にとっての良さ」に対するリーガンの批判を紹介し、次にダーウォールの分析を説明して、それに若干の修正を加え、最後に、その分析によってどのようにリーガンの批判に対処できるかを示したい。

1 「～にとっての良さ」に対するリーガンの批判

リーガンは、道徳的な義務として、人々は他者の人生に生ずることに関心をもつべきである、と主張する (Regan 2004: 202)。おそらく、リーガンが言いたいのは、たとえば、他者に迷惑をかけていないか気を配ったり、他者のためには何ができるか考えたりすることは道徳的な義務である、ということであろう。

もちろん、他者の人生に生ずることが自分の利益に影響を与えるならば、自己利益の観点からして、他者の人生に生ずることに関心を寄せるべきであろう。だが、リーガンはそのような意味で、他者の人生に生ずることに関心をもつべきであると言っているのではない。あくまで、道徳的な意味でそのような義務があると言っているのである。ただ彼は、このような道徳的な義務があることを証明しようとはせず、それを前提にして話を進める。そして、「～にとっての良さ」にもとづいてこの義務の根拠を与えることは不可能である、と批判する (Regan 2004: 210-211)。

リーガンの批判の内容を私なりに解釈したうえで、もう少し詳しく整理すると次のようになる。「～にとっての良さ」は、その良さがその人にとっての良さであるところの当人、すなわち「～」で指されている当人だけに、その良さを望むべき理由を与え、他の人にはそのような理由を与えない。だから、一郎の健康が一郎にとっての良さを促進するならば(そして、一郎の健康を望むべき理由を与えるような事情が他になければ)、一郎の健康を望むべきなのは一郎だけであり、他の人は一郎の健康を望まなくてもよいことになる。このことは一郎だけに当てはまるのではなく、他のいかなる人にも当てはまる。たとえば、直人の健康が直人にとっての良さを促進するならば、直人の健康を望むべきなのは直人だけであり、由紀夫の健康が由紀夫にとっての良さを促進するならば、由紀夫の健康を望むべきなのは由紀夫だけであり、……といった具合になる。そして、このことは、「～にとっての良さ」が「～にとって」という部分を含むことから生ずる論理的な帰結である。

仮に「～にとっての良さ」が、いかなる人にも、その良さを望むべき理由を与えるとしよう。すると、「～」で指されている当人だけでなく、他のいかなる人もその良さを望むべき理由があることになる。たとえば、一郎の健康が一郎にとっての良さを促進するとき(すなわち、一郎の健康が一郎にとって良いとき)には、一郎だけでなく、他のいかなる人も、一郎の健康を望むべきであることになる。このように、「～にとっての良さ」が、いかなる人にも、その良さを望むべき理由を与えるとすれば、いかなる人も他者にとっての良さを望むべきであることになり、そこから、他者の人生に生ずることに関心をもつべき義務が生ずる。しかし、今見たように、「～にとっての良さ」は「～にとって」という部分

を含むから、その論理的な帰結として、「～」で指されている本人だけにしか、その良さを望むべき理由を与えない。したがって、他者の人生に生ずることに関心をもつべき義務の根拠を「～にとっての良さ」にもとづいて与えることは、論理的に不可能である。

リーガンは、「～にとっての良さ」はそもそも存在せず、存在するのは無規定の良さ *good simpliciter* だけであり、「～にとって良い」と我われが言うときには「～の人生の中に無規定の良さが生ずる」ということを意味しているにすぎない、と言っている (Regan 2004: 210)。そして、そうであれば、道徳的な義務としてなぜ他者の人生に生ずることに関心をもつべきかを説明できると主張する (Regan 2004: 211)。彼によれば、無規定の良さは、それが誰の人生の中に生じようとも、いかなる人もそれを促進すべきものなのであり、そこから、他者の人生への関心に対する道徳的な義務が生ずるのである。

以上のようなリーガンの批判に対してどのように応じたらよいであろうか。以上の説明から分かるように、リーガンの批判の要点は次のとおりである。

- (R) 「～にとっての良さ」は「～にとって」という部分を含むから、その論理的な帰結として、「～」で指されている本人だけにしか、その良さを望むべき理由を与えない。したがって、他者の人生に生ずることに関心をもつべき義務の根拠を「～にとっての良さ」にもとづいて与えることは、論理的に不可能である。

これに対して私は、次の二つのことを示すことでリーガンの批判に応じたい。

- ① 他者の人生に生ずることに関心をもつべき義務の根拠を「～にとっての良さ」にもとづいて与えることは、論理的に不可能なわけではない。
- ② たとえそのような義務の根拠が「～にとっての良さ」にもとづいて与えられないとしても、その理由は、「～にとって」という部分を含む論理的な帰結として、その良さが「～」で指されている本人だけにしか、その良さを望むべき理由を与えないから、ということではない。

ダーウォールが提示した「～にとっての良さ」に関する分析を若干修正すれば、それを使って、これら二つのことを示すことができると私は考える。そこで次に、「～にとっての良さ」に関するダーウォールの分析を見てみよう。

2 「～にとっての良さ」に関するダーウォールの分析

ダーウォールは、「～にとっての良さ」に関して、似ているけれど異なる二つの分析を、時を隔てて提出している。ここで修正を加えるのは後に提示された分析である。だから、先に提示された分析には触れる必要がないのかもしれないが、その分析と比べることによって、後に提示された分析の輪郭がはっきりするようにも思うので、まず、先に提示された分析を紹介して、そのどこに欠陥があるかを指摘して、そのうえで後に提示された分析を見てみたい。

2-1 「～にとっての良さ」に関するダーウォールの分析 1

ダーウォールの最初の分析は、次のように定式化できる (Darwall 2002: 7, 8; 2006a: 580, 582)。

DI : XはPにとって良い=df. 我われがPのためにPを気遣っている care
forかぎり、我われはXを望むべきである。

「Pのために」という条件は、Pを気遣いながら、それがPのためではない場合を排除している (Darwall 2002: 13)。Pを怒らせると自分の出世の妨げになるからPを気遣う場合などは、この条件によって排除される。

DIは妥当ではないと私は考える。なぜなら、「すべき」には少なくとも二つの意味(用法)があるが、DIの右辺の「すべき」がどちらの意味であろうと、DIは妥当ではないからである。これを示すために、まず「すべき」のその二つの意味(用法)を説明しよう。目的・手段に関する次の命題を考えてみよう。

Ei : PがAを目的とし、かつ、XすることがAの実現に必要なだと思ってい

れば、PはXすべきである。

Eiが次のことを意味しているでしょう。

Ec : (PはAを目的としている & PはXすることがAの実現に必要なだと思っている) \Rightarrow Pはすべき(Xする)

Ecによれば、「PはAを目的としている」と「PはXすることがAの実現に必要なだと思っている」が真であれば、すなわち、前件が真であれば、「PはXすべきである」ということが導き出される。この場合の「すべき」は、前件から切り離された規範を表す「すべき」である。

こんどは、Eiが次のことを意味しているでしょう。

Eh : Pはすべき((Aを目的としている & XすることがAの実現に必要なだと思っている) \Rightarrow Xする)

これは、次と同じ意味である。

Eh : Pはすべきでない(Aを目的としている & XすることがAの実現に必要なだと思っている & Xしない)

Ehは、「Aを目的としている」と「XすることがAの実現に必要なだと思っている」と「Xする」という三つの事柄の整合性に関する要請を述べている。すなわち、PがAを目的とし、かつ、XすることがAの実現に必要なだと思っているにもかかわらず、Xをしないのは不整合である、と言っているのである。あるいは、PがXしないとすれば、整合的であるかぎり、Pは少なくとも、Aを目的としないか、あるいは、XすることがAの実現に必要なだと思っていないかのどちらかでなければならぬ、と言っているのである。この解釈によれば、Ehの「すべき」は、心的状態・態度や行為の整合性を表す「すべき」である。

このように、「すべき」には次の二つの意味(用法)がある。

- (1)前件から切り離された規範を表す「すべき」
- (2)心的状態・態度や行為の整合性を表す「すべき」

以上のことを踏まえて、D1を見てみよう。そこで、D1の右辺だけを取り出し、C1と名付けよう。

C1：我われがPのためにPを気遣っているかぎり、我われはXを望むべきである。

C1が次のことを意味しているとしよう。

Cc1：我われはPのためにPを気遣っている ⇒ 我われはすべき(Xを望む)

Cc1によれば、「我われはPのためにPを気遣っている」が真であれば、「我われはXを望むべきである」が導き出される。この場合の「すべき」は、前件から切り離された規範を表す「すべき」である。

D1の右辺C1がCc1を意味するとすれば、D1は妥当ではない。XはPにとって良いとしよう。そして、(たとえば極悪人であるために)Pが気遣いに値しないとしよう。すると、我われがPのためにPを気遣っていても、我われがX(すなわちPにとって良いこと)を望むべきかどうかは、定かではない。つまり、Cc1が真であるとは限らない。したがって、D1の右辺C1がCc1を意味するとすれば、D1の左辺が真であっても、その右辺が真であるとは限らない。

こんどは、C1が次のことを意味しているとしよう。

Ch1：我われはすべき(PのためにPを気遣っている ⇒ Xを望む)

これは次と同じ意味である。

Ch1：我われはすべきでない(PのためにPを気遣っている & Xを望まな

い)

Ch1 は、「Pを気遣う」と「Xを望む」という二つの心的態度の整合性に関する要請を述べている。すなわち、我われがPを気遣っているにもかかわらず、Xを望まないのは不整合である、と言っているのである。この場合の「すべき」は、心的状態・態度や行為の整合性を表す「すべき」である。

D1の右辺C1がCh1を意味する場合にも、D1は妥当ではない。XはPにとって良いとしよう。そして、我われは「XはPにとって良い」と思っていないとしよう(たとえば、「XではなくYがPにとって良い」と思っているとしよう)。すると、(整合的であるためにはCh1の中のXの代わりにYが入らなくてはならないから)Ch1は偽になる。したがって、D1の右辺C1がCh1を意味するとすれば、D1の左辺が真であっても、その右辺が真であるとは限らない。

以上のように、D1の右辺の「すべき」が、前件から切り離された規範を表しても、心的状態・態度や行為の整合性を表しても、D1は妥当ではない。したがって、「～にとっての良さ」に関するダーウォールの最初の分析は妥当でない、と結論づけてよいと私は考える。

2-2 「～にとっての良さ」に関するダーウォールの分析 2

「～にとっての良さ」に関してダーウォールが後に提示した分析を見てみよう。それは、次のように定式化できる(Darwall 2006b: 642)。

D2 : XはPにとって良い=df. Pが気遣いに値するならば、我われはPのためにXを望むべきである。

「Pのために」という条件は、Xを望むのはPのためであって、他の何かのためではないことを意味する。

D2の右辺だけを取り出し、C2と名付けよう。

C2 : Pが気遣いに値するならば、我われはPのためにXを望むべきである。

C2の前件は、心的状態・態度や行為を述べているのではないので、C2の「すべき」は、心的状態・態度や行為の整合性を表す「すべき」と解釈することはできない。したがって、C2の「すべき」は、前件から切り離された規範を表す「すべき」であると考えるのが順当であろうし、ダーウォールもそう考えているように思われる。そこで、C2の「すべき」は、そのような「すべき」であるとみなそう。すなわち、C2は次のことを意味していると解釈しよう。

C2 : Pは気遣いに値する ⇒ 我われはすべき(PのためにXを望む)

右辺にこのような解釈を施したD2は、「～にとっての良さ」の分析としてかなり好い線を行っているように思われるが、私は若干の修正を加えることで、より妥当な分析にしたい。

まず、C2の前件は「Pが気遣いに値するならば」であるが、誰にとってPが気遣いに値するかが明示されていない。ところで、誰にとってPが気遣いに値するかの「誰」と、誰がPのためにX(Pにとって良いこと)を望むべきかの「誰」は同一でなければならないであろう。Pが気遣いに値するのは一郎にとってだけだとすれば、一郎だけがPのためにX(Pにとって良いこと)を望むべきであろうし、また、いかなる人にとってもPが気遣いに値するならば、いかなる人もPのためにX(Pにとって良いこと)を望むべきであろう。とすれば、C2の後件が「我われはPのためにXを望むべきである」なので、C2の前件は「我われにとってPが気遣いに値するならば」を意味することになる。これを明らかにするようにC2を書き換えれば次のようになる。

C2 : 我われにとってPが気遣いに値するならば、我われはPのためにXを望むべきである。

しかし、第3節で述べるように、Pが誰にとって気遣いに値するかは、Pが気遣いに値する根拠が何であるかによって左右される。だから、その根拠として何が適切であるかが定まらなければ、C2の前件に「我われにとって」と書き込んで

よいかも定まらない。したがって、ここではこの点是不確定にしておいて、C2の前件は「YにとってPが気遣いに値するならば」としておこう。すると、今述べたように、誰にとってPが気遣いに値するかの「誰」と、誰がPのためにX(Pにとって良いこと)を望むべきかの「誰」は同一でなければならないから、後件は「YはPのためにXを望むべきである」になる。すなわち、C2は次のようになる。

C2-1: YにとってPが気遣いに値するならば、YはPのためにXを望むべきである。

さて、C2-1では、「YにとってPが気遣いに値する」が「YはPのためにXを望むべきである」の十分条件になっている。では、「YにとってPが気遣いに値する」は必要条件ではないのであろうか。もしないとすれば、YにとってPが気遣いに値しなくとも、YがPのためにXを望むべき場合があってもおかしくないことになる。しかし、「YにとってPが気遣いに値する」は必要条件でもあると考えてよいであろうし、ダーウォールも、そう考えていたと思われる。たとえば、人はひどい自己嫌悪に陥ると、「自分は誰にとっても気遣いに値しないような価値のない人間であるから、自分にとって良いことを(自分のために)望むべき理由など(自分を含めて)誰にもない」と思うてしまうことがある。このように考えることは理にかなっているとダーウォールは主張する(2002: 6; 2006b: 642)。すなわち、「ある人が誰にとっても気遣いに値しないならば、その人にとって良いことをその人のために望むべき理由は誰にもない」と考えるのは、理にかなっているというわけである。このダーウォールの見解は納得がいく。とすれば、この見解の「誰」の部分「Y」に変えても同じことが言えると思われるので、「YにとってPが気遣いに値しないならば、PのためにXを望むべき理由はYにはない」とも言えるであろう。それゆえ、「YにとってPが気遣いに値する」は「YはPのためにXを望むべきである」の必要条件でもあったと考えてよいのではないか。これを踏まえてC2-1を書き換えると次のようになる。

C2-2: YにとってPが気遣いに値するならば、そしてその場合にのみ、YはPのためにXを望むべきである。

先に述べたように、C2の「すべき」は、前件から切り離された規範を表す「すべき」であるから、C2-2は次のことを意味している。

C2-2: YにとってPは気遣いに値する ⇔ Yはすべき(PのためにXを望む)

以上の考察にもとづいて、D2の右辺にC2-2を置いてみよう。すると、次の分析が得られる。

D2*: XはPにとって良い=df. YにとってPが気遣いに値するならば、そしてその場合にのみ、YはPのためにXを望むべきである。

D2*は妥当であると思われる。XがPにとって良いとしよう。すると、YにとってPが気遣いに値するときには、YはPのためにPにとって良いこと(つまりX)を望むべきであろう。また、YがPのためにPにとって良いこと(つまりX)を望むべきならば、YにとってPは気遣いに値すると言えよう。次に、YにとってPが気遣いに値するときに、そしてそのときに限り、YはPのためにXを望むべきであるとしよう。すると、そのXはPにとって良いことでなければならぬと言えよう。

D2*はダーウォールの分析D2の修正版であるが、私はこの分析を「～にとっての良さ」に関する有望な分析として提示したい。

3 リーガンの批判への応答

前節で提示したD2*によって、「～にとっての良さ」に対するリーガンの批判に応ずることができる私は考える。第1節で説明したように、リーガンの批判の要点は次のとおりである。

- (R) 「～にとっての良さ」は「～にとって」という部分を含むから、その論理的な帰結として、「～」で指されている本人だけにしか、その良さを望むべき理由を与えない。したがって、他者の人生に生ずることに関心をもつべき義務の根拠を「～にとっての良さ」にもとづいて与えることは、論理的に不可能である。

これに対して私は、D2*にもとづいて次の二つのことを主張したい。

- ① 他者の人生に生ずることに関心をもつべき義務の根拠を「～にとっての良さ」にもとづいて与えることは、論理的に不可能なわけではない。
- ② たとえそのような義務の根拠が「～にとっての良さ」にもとづいて与えられないとしても、その理由は、「～にとって」という部分を含む論理的な帰結として、その良さが「～」で指されている本人だけにしか、その良さを望むべき理由を与えないから、ということではない。

まず①から始めよう。ある人が誰にとって気遣いに値するかは、その人が気遣いに値する根拠がどのようなものであるかによって左右される。ある人が気遣いに値する根拠としては、たとえば、以下のものが考えられる。

- (1) 可感的存在者 a sentient being であるということが根拠になる。
- (2) 人 a person であるということが根拠になる。
- (3) 道徳的に著しい瑕疵のない人であるということが根拠になる。
- (4) 「自分だから」ということだけが根拠になる。

(1)はダーウォールの見解である(Darwall 2006b: 645)。この見解によれば、ある人が気遣いに値するのは、その人が可感的存在者だからである。(2)はコニー・ロサッティ Connie Rosati の見解である(Rosati 2008: 341n, 344)。この見解によれば、ある人が気遣いに値するのは、その人が人だからである。(3)の見解によれば、ある人が気遣いに値するのは、その人が道徳的に著しい瑕疵のない人だからである。ここで言う「道徳的に著しい瑕疵」とは、他者にひどい不利益をも

たらず行為を平気で繰り返すといったことを意味する。(4)によれば、ある人が気遣いに値するのは、その人が自分だからであり、他のことのためではない。

(1)が正しいとしよう。すると、ある人が可感的存在者であるかぎり、(その人がある人にとって可感的存在者であり、他の人にとっては可感的存在者ではない、ということはないから)その人はいかなる人にとっても気遣いに値することになる。次に、(2)が正しいとしよう。すると、ある人が人であるかぎり、(その人がある人にとって人であり、他の人にとっては人ではない、ということはないから)その人はいかなる人にとっても気遣いに値することになる。また、(3)が正しい場合も、ある人が道徳的に著しい瑕疵がないかぎり、(その人がある人にとっては道徳的に著しい瑕疵がない人物であり、他の人にとってはそうではない、ということはないから)その人はいかなる人にとっても気遣いに値することになる。ところが、(4)が正しいければ、ある人が気遣いに値するのは、その人自身にとってだけになる。すなわち、一郎にとって気遣いに値するのは一郎だけであり、直人にとって気遣いに値するのは直人だけであり、……ということになる。このように、ある人が誰にとって気遣いに値するかは、その人が気遣いに値する根拠がどのようなものであるかによって左右される。

さてここで、前節で提示したD2*を見てみよう。それは次のような分析である。

D2* : XはPにとって良い=df. YにとってPが気遣いに値するならば、そしてその場合にのみ、YはPのためにXを望むべきである。

D2*の右辺のYに「いかなる人」を入れよう。すると、D2*は次のようになる。

D2*-1 : XはPにとって良い=df. いかなる人にとってもPが気遣いに値するならば、そしてその場合にのみ、いかなる人もPのためにXを望むべきである。

(1)が正しいとしよう。すると、今述べたように、Pが可感的存在者であるかぎり、いかなる人にとってもPは気遣いに値することになる。さらに、XはPにとって良いとしよう。すると、 $D2^*-1$ にもとづいて「いかなる人もPのためにXを望むべきである」ということ、(仮定によりXはPにとって良いことであるから)すなわち「いかなる人もPのためにPにとって良いことを望むべきである」ということが導き出される。このように、(1)が正しければ、 $D2^*-1$ にもとづいて「Pが可感的存在者であるかぎり、いかなる人もPのためにPにとって良いことを望むべきである」ということが導き出される。そして、この中のPに他者を入れれば、「他者が可感的存在者であるかぎり、いかなる人も他者のために他者にとって良いことを望むべきである」という結論が得られる。また、(2)が正しければ、同じ手順によって、「他者が人であるかぎり、いかなる人も他者のために他者にとって良いこと望むべきである」という結論が得られる。さらに、(3)が正しければ、同じ手順によって、「他者が道徳的に著しい瑕疵がない人であるかぎり、いかなる人も他者のために他者にとって良いこと望むべきである」という結論が得られる。

ここでの他者とは人であるから、そして、人は可感的存在者であるから、以上のことから分かるように、(1)か(2)が正しければ、 $D2^*$ にもとづいて「いかなる人も他者のために他者にとって良いこと望むべきである」ということが導き出される。そして、そうであれば、(他者にとってよいことを望むことは、他者の人生に生じていることに関心を払うことを伴うから)、いかなる人も他者の人生に生じていることに関心を払うべき義務を負うことになるであろう。このように、(1)か(2)が正しければ、いかなる人も他者の人生に生じていることに関心を払うべきである、という義務が $D2^*$ にもとづいて導き出される。また、(3)が正しければ、同じように、「他者が道徳的に著しい瑕疵がないかぎり」という条件は付くにせよ、いかなる人も他者の人生に生じていることに関心を払うべきである、という義務が $D2^*$ にもとづいて導き出される。

このように、(1)、(2)、(3)のいずれかが正しければ、いかなる人も他者の人生に生じていることに関心を払うべきである、という義務が $D2^*$ にもとづいて導き出される。もちろん、(1)、(2)、(3)のそれぞれが本当に正しいかどうかは議論の余地がある。しかし、それらすべてが論理的に成立不可能である、とは

言いがたい。だから、いかなる人も他者の人生に生じていることに関心を払うべきである、という義務が D2* にもとづいて導き出されるということは、論理的に不可能なわけではない。つまり、①が成り立つ。

次に(4)が正しいとすると、どのようなことが D2* にもとづいて導き出されるかを見てみよう。そこで、D2* の右辺の Y に P を入れよう。すると、D2* は次のようになる。

D2*-2 : X は P にとって良い=df. P にとって P が気遣いに値するならば、
そしてその場合にのみ、P は P のために
X を望むべきである。

(4)が正しいとしよう。すると、先に述べたように、ある人が気遣いに値するのは、その人自身にとってだけになる。だから、P にとって P は気遣いに値することになる。さらに、X は P にとって良いとしよう。すると、D2*-2 にもとづいて「P は P のために X を望むべきである」ということ、(仮定により X は P にとって良いことであるから)すなわち「P は自分のために自分にとって良いことを望むべきである」ということが導き出される。このことは、P だけではなくいかなる人にも当てはまると考えてよいであろう。したがって、(4)が正しいとすれば、D2*-2 にもとづいて「いかなる人も自分のために自分にとって良いことを望むべきである」という結論が導き出される。

次に、Y に(Pとは異なる人)Q を入れよう。すると、D2* は次のようになる。

D2*-3 : X は P にとって良い=df. Q にとって P が気遣いに値するならば、
そしてその場合にのみ、Q は P のために
X を望むべきである。

(4)が正しいとしよう。すると、繰り返しになるが、ある人が気遣いに値するのは、その人自身にとってだけになる。だから、Q にとって P は自分ではない(他者である)ので、Q にとって P は気遣いに値しないことになる。さらに、X は P にとって良いとしよう。すると、今述べたように、Q にとって P は気遣いに値し

ないから、D2*-3にもとづいて「QはPのためにXを望むべきである、とは言えない」ということ、(仮定によりXはPにとって良いことであるから)すなわち、「QはPのためにPにとって良いことを望むべきある、とは言えない」ということが導き出される。このことは、PやQだけではなくいかなる人にも当てはまると考えてよいであろう。したがって、(4)が正しいとすれば、D2*-3にもとづいて「いかなる人も他者のために他者にとって良いことを望むべきである、とは言えない」という結論が導き出される。

以上のように、(4)が正しければ、D2*にもとづいて「いかなる人も自分のために自分にとって良いことを望むべきである」ということは導き出されるが、「いかなる人も他者のために他者にとって良いことを望むべきである」ということは導き出されない。したがって、(4)が正しければ、D2*にもとづいて、いかなる人も自分の人生に生じていることに關心をもつべきである、という義務は与えられるが、いかなる人も他者の人生に生じていることに關心をもつべきである、という義務は与えられない。

このように、(4)が正しければ、いかなる人も他者の人生に生じていることに關心をもつべきである、という義務はD2*にもとづいて与えられない。しかしその理由は、以上の説明から明らかなように、(4)が正しいから、ということであって、「～にとっての良さ」は、「とつて」という部分を含むから、その論理的帰結として、「～」で指されている本人だけにしか、その良さを望むべき理由を与えないから、ということではない。したがって、②が成り立つ。

文献表

- Darwall, Stephen. 2002. *Welfare and Rational Care*. Princeton University Press.
- Darwall, Stephen. 2006a. "Precis of "Welfare and Rational Care"." *Philosophical Studies* 130: 579–584.
- Darwall, Stephen. 2006b. "Reply to Feldman, Hurka, and Rosati." *Philosophical Studies* 130: 637–658.
- Regan, Donald H. 2004. "Why am I My brother's Keeper?," in *Reason and Value*, eds. Wallace R Jay, Phillip Pettit, Samuel Scheffler, Michael Smith, Oxford

「「～にとっての良さ」について」

University Press 2004.

Rosati, Connie S. 2008. "Objectivism and Relational Good," *Social Philosophy and Policy* 25: 314–349.